

# 「夢追いフリーター」へのまなざし

## ——社会人劇団への参加者の語りからの分析——

早稲田大学 高橋かおり

### 1. 目的・問題意識

「フリーター（非正規雇用労働者）」はもともと夢を追う人を応援する意味として用いられ始めた造語である。しかし現代ではいわゆる「夢追いフリーター」—文化的活動（音楽・美術・演劇等）に関わるフリーター—は否定的に捕らえられることが多い。このような語りは外側からのみならず文化的活動に「趣味」として関わりつづける「社会人」たちからも聞かれるものでもある。そこで本報告では演劇を事例として、「趣味」として演劇を続ける人たちのまなざしから逆照射することによって「（夢追い）フリーター」の社会における位置づけを試みる。そして「フリーター」を生み出す社会的構造を踏まえた上で、若者を取り巻く生活環境の改善への糸口を提示したい。

### 2. 方法

本報告では、首都圏で社会人劇団に参加をする20代の女性11名のインタビューと、彼女らの活動への参与観察（2013年3～9月）をもとに分析を行う。彼女たちは学生時代から演劇サークルや劇団に参加をし、就職（活動）にともない一時中断をしつつも「趣味」として演劇を続けている。演劇を「仕事」ではなく「趣味」として選択をした自身のキャリアと、演劇を「仕事」とするために不安定な雇用を選択した（かつての）仲間たちのキャリアとを比較する語りを中心に分析を行う。

### 3. 結果・結論

インフォーマントの語りからは、「夢追いフリーター」ととらえられる演劇人に対して蔑視のまなざしと同時に羨望のまなざしが複雑に絡み合う構造がみられた。「演劇を中心にした生活は自分には出来ない」ということは、「自己に技能がない」という技術にかかわる問題ではなく、不安定さの決断に対する評価や将来設計への疑義など、生活状況に対する点へというライフスタイルの問題として語られる。ここには、文化的活動をめぐる2つの構造が関係している。

#### （1）文化的活動を支える業界構造の問題

近年では演劇人の専門職性を問い直す議論（佐藤 1999、米屋 2012）が起こり、各種支援制度も拡充しつつあるが、劇的な構造変動はおこっていない。つまり、文化的活動を「仕事」として安定した収入源をえつつけることは、現状ではそもそも構造的に難しい。

#### （2）就労状況をめぐる問題

社会人において「趣味」を両立させるためには、彼女らの就労環境をめぐる問題も関わる。社会人劇団を継続するために、インフォーマントらは有給休暇のやりくりや、稽古以外の時間での残業などを行わざるをえない状況にあった。たとえ制度的に確保されていたとしても、ワーク・ライフ・バランスを実施することは、誰にでも可能なことではなく、ある程度の負担も生じる。社会人で趣味として演劇を続けることにも、ある種の「覚悟」が求められるのである。

「夢追いフリーター」が生み出されるのは、若者たちの甘えや彼らの（芸術的な）技能不足という問題に単純に回収されるものではなく、文化的活動の構造の問題と就労状況をめぐる問題とが絡まり合った結果でもある。この構造的な問題の解決は容易なものではない。しかし、若者たちが人生の進路選択の時点でこの現状を「知る」機会を得ること、その上で戦略的に進路選択と人生設計を行えるようにすることは問題解決の糸口になりえるのではないだろうか。

#### 参考文献

- 佐藤郁哉 1999『現代演劇のフィールドワーク——芸術生産の文化社会学』東京大学出版会  
米屋尚子 2012『演劇は仕事になるのか——演劇の経済的側面とその未来』彩流社